白椿の精

しろつばき　せい

登場人物

ナレーター

娘（むすめ）

若者（わかもの）

茶店（ちゃみせ）の主人（しゅじん）

茶店（ちゃみせ）の客（きゃく）

旅人（たびびと）1

旅人（たびびと）2

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

旅人1
旅人2

むかし海老名に伝わるお話です。
国分にあるお薬師様の境内に、大きな白椿の木がありました。
毎年白い花をたくさん咲かせ、それはそれは見事でした。
お薬師様の境内の下には、大山街道が通っていて、大山参りの旅人などでにぎわっていました。
白椿が咲くと街道を行く人たちは、
「いい香りがすると思ったら、この椿の木か」
「見事な花ですね」
と上を見上げ、思わずその美しさに足を止めて見とれていました。
椿の花が咲き出す季節に決まって日が暮れ始めると、お薬師様の門前にひとりの美しい娘が現れました。
黒髪をすっきり後ろにたらし、きめ細かな肌に薄いすずやかな着物を身につけ、何とも言えぬ良い香りをただよわせて、気品にあふれていました。
この娘が、どこの誰か知る人はいません。
茶店にたびたび立ち寄る人たちは、

客

茶店の主人

客

客

茶店の主人

客

「今日は、あのべっぴんさんが来ているが、どこの娘さんかね」

「わしも知らんのだよ。この近くでは見かけないが誰か知らんかね」

「となり村の娘ではないのか」

と、みな口々に噂をしていました。

声をかけようにも何か近寄りがたい気高さがあり、ただ見とれているばかりでした。

娘は茶店で一杯のお茶を飲んで休むだけでしたが、不思議と娘が立ち寄る店は栄えていくのでした。

しかし、白椿の花がみんな散ってしまう頃になると、ばったり娘も来なくなってしまいました。

「今日も娘さん来んのかね」

「この頃とんと来んのだよ。病気にでもなっていなければいいが」

「また顔出してくれんかの。見ているだけで幸せになれたのに」

と誰もが心配していました。

白椿の花が咲き出した春、あの美しい娘が茶店に姿を見せ始めました。

若者

若者

若者

娘

若者

娘

もの好きな若者が、ある晩そぉーっと後をつけましたが、お薬師様の石段の途中でパッと姿が消えてしまいました。

「あれ、さっきまで前を歩いていたのに…。

おーい娘さん。おーい娘さん。どこに隠れたのかなぁ…」

とあたりをいくら探しても、どこにも見当たりません。

若者はあきらめきれず、何とかしてどこの娘かつきとめようと一晩考えた末、針に長い糸を通しておくことを思いつきました。

「よし。うまくいくといいんだが…明日試してみよう」

次の日の夕暮れ、娘が現れると若者は思い切って娘に声をかけました。

「あのう。きのうはどこに隠れたんですか。ずいぶん探しましたよ」

と尋ねると、

「ごめんなさい」と娘は困った顔をしました。

「今夜は、家まで送らせてください」

「近くですので、ひとりで帰れます。ありがとうございます」

と娘は、申し訳なさそうにことわるのでした。

若者

茶店の主人

そこで、若者はさりげなく娘の着物のたもとに針を通して、そしらぬ顔で別れました。

翌朝、その糸をたどってみると、糸はお薬師様の白椿の梢高く続き、針は一枚の花びらに突き刺さっていました。

若者は椿の木を見上げ、

「もしや白椿の精なのかも。あんなことしなければよかった」

と心を痛め、茶店の主人に一部始終を話しました。

「そうか、やはり娘さんは白椿の精であったか」

どうりでこの世の者でない美しさがあったと、大評判になりましたが、それっきり娘は二度と姿を現すことはなかったそうです。

今も同じ場所に椿の木がありますが、この椿が伝説の椿か、あるいは子孫の木かは定かではありません。